釋迦御一代記圖會　六

へ 13
4037
6

釋迦御一代圖會巻之六

目録

祇園精舎造立毘首謁摩彫木佛
天童扶謁摩手令造木佛圖
世尊説木佛功德
大愛道比丘尼涅槃
流離王屠殺伊沙袠那國人民
流離王鏖伊沙袠那國人民圖
流離王雷死天火燒宮殿
雷神罰討流離王ノ王臣圖

GL 42 8659
昭和42年12月12日
和田大作氏寄贈

へ13
4037
6

釋尊説法大略
舍衛國人民屠大魚圖
釋尊遺言并涅槃
如來滅後現五妙神力
諸國王得佛舍利歸國圖

釋迦御一代圖會巻之六

祇園精舍造立毘首羯磨彫木佛

浪華　好華堂野亭考選

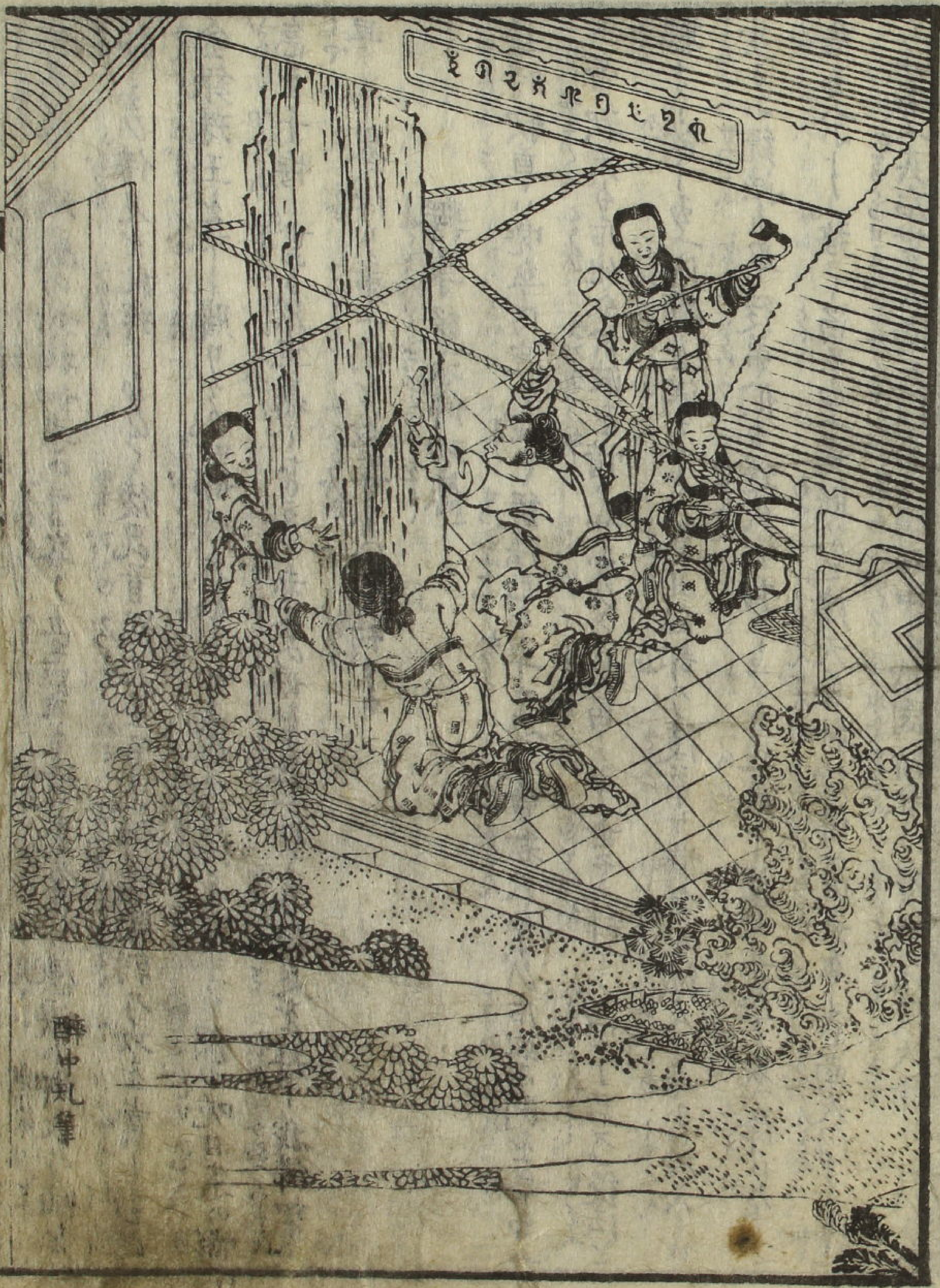
須達長者一度佛顔を拜してより舍衛國に道場を開き世尊を招請して國人に佛教を聴させ悪を去善に皈せしめんと無數の財宝を抛ち祇陀太子月蓋長者們と心を合せ既に精舍を造立せんとせしに六道師是を拒ぎ術捔に事を寄て精舍營立を停止せんと巧しかば須達大に心を困らしが舍利弗尊者大神通を顕して六道師を拉ぎ却て佛弟となし國王卿相すべて佛法の不可思議を尊信ありしより長者天に歓び地に喜び太子月蓋と倶に工匠を屬して堂塔を造営す境内方四十里（日本里数六里廿四丁）檀特山の法姓臺真如臺雪山の發心本覚臺法性妙覚臺真如妙法臺以上五臺を表して先五院を建是を祇陀院療病院施薬院安穏院戯楽院と号せり其他四十九院千二百房三千の回廊瓦を玉を磨き棟ハ桂を擇て堂塔の荘厳七宝を鏤

錦繍を布しそのきらびやか兜率内院に異ならず。かゝる眼を驚かさゞるはなし
斯て精舎成就しければ。祇陀太子波斯匿王へ近臣を以て精舎已に造営おわり
ぬれば願くは又大王勅使を王舎城へ立。世尊を招請しましませと申されければ國王勅
許あり。即ち勅使を王舎城善勝道場へ立られ世尊を請招ありしに世尊も舎
衛國に精舎成就せしを歓喜しまひ。二千五百の大衆を従へて彼國へ赴きたまふに
二十里毎に驛亭有て奇を設供養しまする是須達が命ずる所なれば世尊
深く其信心を感じ玉ふ。斯て如来路上の人民を化度し光明を放て舎衛國の
羅狗耶城近く到りたまへば。國王の勅使及び須達月蓋迎なりて造営せし精
舎に請じ入進まするに。世尊其地形の平博なると。堂塔の山巍々たるをみたまひ
御感斜ならず。祇陀太子の園なれば祇園精舎と号たまひ。亦給孤独長者の
用し道場なれば。給孤独園とも号たまひけり。其后祇陀院に於て始て説法
しまひければ。波斯匿王をはじめ后妃太子諸臣下諸官人國人まで群参して聴

聞し信心渇仰する事浅からず。世尊亦療病院に於て國中の病者を醫療し
施薬院に於て國人に医薬を施しまふ程に。盲人も眼を開き聾者は能く聞き
瘂は能ものいひ僂はよく起。其他種々の難病者といへども治せざるはなかりければ。貴賤挙て
佛法の功徳廣大なるを感じ。出家して佛弟子となるもの數しらず。國王波斯匿
王も深く信有るによりて。世尊祇園精舎に在て説法しまふ事七年に及ぬ。然
るに帝釈天久しく如来の説法を聴まつらざるを以て世尊を兜率内院に招請せまほ
しく思召ると。世尊早く知て思ひ玉ふに。幸なる頃日四部の衆安逸に耽り勤行懈怠
する者多し。是們が心を戒しめん為昇天せんと。十大弟子にのみ告たまひ。金光と化して
第三十三天兜率内院に昇ませば。帝釈天および后妃御歓喜限りなく種々に供養し
たまひければ。世尊も歓喜しまひ。為に法華經を説たまふ。祇園精舎には得六神通の
阿羅漢なれど。おのおの如来の昇天を知られ。四部の大衆は世尊のみえたまはざるを以て
大ひに驚き何地へ往たまひしと。十大弟子に問ども敢て告ざりしかば。四部の

大衆も惆然する許なり。何ぞ波斯匿王精舎へ詣しまひけるに世尊在されど錫をめの
舎利弗に就て其故を問まへ。舎利弗が白須日四部の大衆。身の安逸に耽り動行
懈怠をするを以て。如来是を織めまひんが為俤と弟子们にもしらせまへ。兜率天
へ昇らひ帝釈の殿裡にて法華経を説て在り。國王が曰朕如来に見へてより心
に悪念を生せず。然るに今世尊遠く高天に住まへ。朕が意甚ぞ楽しまず。你
天下に名匠を撰び。如来の像を摹刻せしめ。此精舎に安置せよ。朕如来の天より
降り来るまで。木佛を世尊とし崇め拝せんと命じまへ。舎利弗國王の渇仰深れ
を感嘆し。敬で王命を領掌し。普く國中に名工を求るに。彼舎衛國の偏鄙に
毘首羯摩といふ者あり。天性工匠の道に秀。木を彫て禽獣を造るに能飛動
する程の堪能なりしが。深く三寶に皈依し。平日に祇園精舎へ詣し。如来の説法
を聴聞し。佛顔をも能ゝ熟視をりければ。舎利弗羯摩を招よせ。王命を告て。如来
の法躰を摹刻しまれよと命ずるに。羯摩歓喜踊躍し。我前生いかなる福縁に

依て無上本覚の如来の尊容を彫刻しまする事。生前の面目死後の本懐何事
か是に過んや。清浄水を以て身を清むる事七日。栴檀の良材を撰て一室に閉
篭り。敢て他の工匠を交ず。其身唯一人一度彫むてふに三礼し。精神を凝して
ぞ摹刻しまつる。羯摩が妻は室外に在て。夫が独力を以て佛像を摹刻せん
ておぼつかなく思ひ一夜窃に物の透間より室中を䚄ひ見るに數十人の天童在
て羯摩が左右に侍り其力を扶るにぞ妻も奇異の思をなしける。斯て羯摩
日数重て丈六の佛像を彫畢りたる是木佛の権与なり是に依て舎利
弗須達長者と議して祇園精舎に一字の宝殿を新に造営し羯摩が造る所の
霊像を安置し五鈷独鈷鈴瓶大舎三摩耶摩尼地盤塗妙三鈷鐃鉢等の
佛具を備へ供養しまつり。且佛像成就の旨を國王へ告上るに波斯匿王太子卿
相を従へて精舎へ臨幸あり。宝殿へ昇て尊像を拝覧しまふに毘首羯摩が精
神をこらし上天童工を補助して一刀三礼し摹刻まつる事なれば三十二相八十種



毘首羯摩天童の助力と得て木佛を彫む図

好具足し端厳の妙相如来のすがたと毫髪も違ふ事なし感涙に御衣の袖を沾しおはしぬ。仏足を礼拝しおはして後毘首羯摩を召し仏像彫刻の功を賞しおはし金銀珠玉を下し賜りける。四部の大衆も如来の霊像を拝して潤に晩日来の懈怠を千悔し世尊を追慕しまゐらせて赤子の母を慕ふが如く各仏足を拝し我仏如来早く下界へ降り弟子們を教導ましませと祈る

釈尊説二木仏功徳一

這時釈尊は兜率内院に在て説法已に畢られば。帝釈天および后妃に別を告給ふに帝釈天も后妃も余波を惜ませたまひて抑留しまゐらせけるに。世尊辞して曰予君の説法を聴まく欲し給ふ御願を満たまはん為且は四部の徒弟が懈怠を誡ん為に昇天しけれども既に説法も畢。徒弟們も過失を悔て予を追慕しければ且先下界へ降りなんと告給ふにより強て留め給ふ事能はず。諸天善神諸仏菩薩を集して南天門まで送らせ給ふ。其后世尊は南天門より一瞬の中に祇園精舎の宝殿の裡へ天降りたまひけれ

ば四部の大衆蘇生の人に遭がごとく。歓喜踊躍せざるといふ者なし。世尊は安置せし木仏を見たまひ善哉と賞誉し合掌して三礼したまへば木仏もまた合掌して如来を拝したまふぞ不思議なる。摩訶迦葉迦旃延阿難の三弟子世尊に対し奉り向て曰。我仏如来無上聖位真実の直仏の御身として。仮容無心の木仏を礼拝したまふ事不審なりと告。世尊曰三弟子の不審理なり然ながら予木仏の形容をまるびて礼をなすにあらず其功徳のあるを拝するなり。それ三礼に三信あり。所謂偽敬三拝。狂念三拝。功徳三拝是なり。偽敬は無智の三拝。狂念は逆忘の三拝。功徳を智見の三拝。予今此木像を拝せしは功徳三拝なり。富留那酒菩提阿那律以下亦向て曰這木仏に如何なる功徳のありや。世尊曰你們も予は自己直仏にして三論を出ず。故に末期あり。這木仏は三論なし。故に末期なく無量寿なり。然ば仏なるをもつて法なく法なるをもつて功徳なし。予滅度を執ても予が法滅する事なし。予が法滅しても功徳滅する事有べからず。再び木仏に対ひ

善哉々々子が滅度の後四部の緒弟子盡く你に附属せん末世億々の衆生を済度せよとて亦緒羅漢に對て曰。這木像に三説あり。所謂己説一説無説是なりそれ己説と謂ハ久遠劫のむかし因位無量無種の説にして。這像此精舎に有ん程ハ功徳空しからず。衆生信を求て恭敬礼拝せバ即ち功徳の主となりて。坐禅思惟の正躰なり亦一説と謂ハ正念信敬の功徳ありて罵ども怒らず讃むれども怡ばず。無念無想の功徳空々塵埃にして。廣衆如律の功徳より將無説と謂ハ不説して説所信なり。敢て言語の及ぶ所にあらず。後佛出世の血脉無佛中間の法主なり。若後世佛像を造りて供養する者ハ必ず成佛得脱せしと説玉ふにぞ。十大弟子十六羅漢二千五百の大衆聽衆に八國王太子后妃卿相無數の國人まで。如来の妙説を聴聞して随喜の涙を催し。異口同音に南無佛と唱へ如来および木佛を恭敬礼拝しをりけり
因に曰。此後優塡王世尊を追慕して紫摩黄金を以て佛像を造る高サ五尺是金佛の権与なり。亦阿育王石像を造る高サ一丈六尺是石佛の権輿なり

大愛道比丘尼涅槃

却説世尊の継母君憍曇彌夫人ハ一度嫉妬の悪念を翻して心を善道に皈したまひ浄飯王崩御の後ハ。如来の徒弟となりて戒律を授りたまひ。大愛道比丘尼と称せられ。惟耶黎精舎といへる道場を開き。五百人の女僧と二六時中の勤行懈怠なく行ひをなして在けるに年記六十一歳にして仮初の病に臥たまひけるが已に終焉の期来るを知覚したまひ。如来に末期の對面せまほしく思召阿難尊者に就て吏の子細を告させたまへ阿難大愛道の命終に臨むを歎く大に驚き世尊に謁して曰。大愛道の御患病仮初の御事と思ひしに終焉近きおはします末期に如来の法顔を拝せまほしく願ひたまへりと言上す。世尊默首したまひ。大愛道の御使。道心堅固に勤行したまひ。已に法眼浄を得たまへば。早く涅

洹の期を知玉へり。抑予出生して七日にして、先妣摩耶夫人薨去し玉ひ、其后ハ大愛道の慈育にて成長、發心門に入て一切種智を得る事、偏に大愛道の高恩にして、是にくらべて八須弥山も猶高しとせず、滄海も猶浅しとす。予萬一の謝恩の為彼精舎へ来りて説法し、且ハ大往生を拝しまゐらせんとて、十大弟子と倶に惟耶梨精舎へ到り玉ひ、末期の御對面をなし玉へバ、大愛道歓喜し玉ふこと斜ならず。病林を離れて佛足を拝し玉ひ、偖告玉ひけるハ、躬ハ是罪障深き女の身なれども、如来の教化に依て三宝に皈依し、戒律を授り、功力にて苦集尽道眼を開く事を得、今往生の素懐を遂る事も、法王如来の大恩なり。唯願くハ終焉に説法一座を演玉へと乞玉へバ、世尊領掌し玉ひ、善哉々々。それ乾坤久しと雖、窮あれど終なからんや。有なるが、三界の無常ハ夢のごとく幻のごとく、生じて死せざる者有ことなし。就中女ハ罪障の雲深く、貪瞋癡の霧雰やゝもすれバ、永く悪趣に流轉して、真如の月を見ること難しといへども、大愛道ハ勇猛精進一念不動の功力に依て、緒の有結を盡し、無所著を得て極楽浄土に往生し玉んこと疑ひ有べからずとて、金剛般若経を説、比喩を挙て説法し玉ひければ、大愛道歓喜踊躍し玉ひ、五百の除饉女（尼僧の別号）も随喜の涙をとゞめて聴聞しけり。斯て如来の説法も畢ければ、大愛道（逝去る）師徒の為に命を投て供養し玉ひ、其夜子の刻に端坐合掌して禅定に入が如く逝去し玉ひけり。あまたの女僧今更宛転哀哭して余波を惜まざるなし。世尊種々錬制し玉ひ、栴檀の棺に収め、忉利天正寺に送り、香油をそゝぎ荼毘しまゐらせ玉ふぞ。難陀王大愛道の遺骨を収て、浄飯王の廟の右に七宝荘厳の浮屠をたてゝ、残る方なく追福作善し玉ひけるハ、難有かりし御事なりき。

流離王屠殺伊家耶國人民

茲に阿世羅國と云る國の都羅狗耶城の主優填王とて、入深く世尊の妙法に皈依し、紫磨黄金の佛像を鑄させ、肉身の如来にひとしく、朝暮礼拝供養し玉ひけるが、信心の余り想れけるハ、隣國舎夷國ハ浄飯大王の御弟斛露飯王の國に

て親しみ世尊の法族なれば。朕其妃を得て後宮に難ひ幸して一子を設け此國と
繫む。是如来と同宗の釋種なり。永く法脈を絶さず國家安静なるべし。よつて
即ち舍衛國へ使者を立て親婚の義を望まれける。此時斛露飯王ハ逝去ありて嗣
子匿婆王世を治られけるが。今優填王の使者を得て。臣下を聚め此義如何あらん
と評議ある。臣下の筆織して曰けるハ。阿世羅國ハ原我が國の属國にして臣下と
然るに王の公主を需て妻妾にせんとするハ甚だ禮に背けり。唯使者を鞭撻て
追返しむべしと告ける。臣下の中に摩訶男といふ人抑止て曰。優填王の望礼に違へり
といへども其本心我が國を侮ての故にあらず。三宝に皈依の余り。釋種の胤を得ん
と欲するなれば強ち悪むべき義にあらず。然るを妄に使者を辱めて追返さバ
好意却て悪心と変じ。怒激を發して兵馬を起し攻来べし。我國の君臣上下如
来の戒律を保て殺生を禁じ。小虫といへども殺さず。况軍戦などハ思もよらず
小臣愚案を廻しに一ツの計策あり。小臣に一人の處女あり。頗る端正美皃な

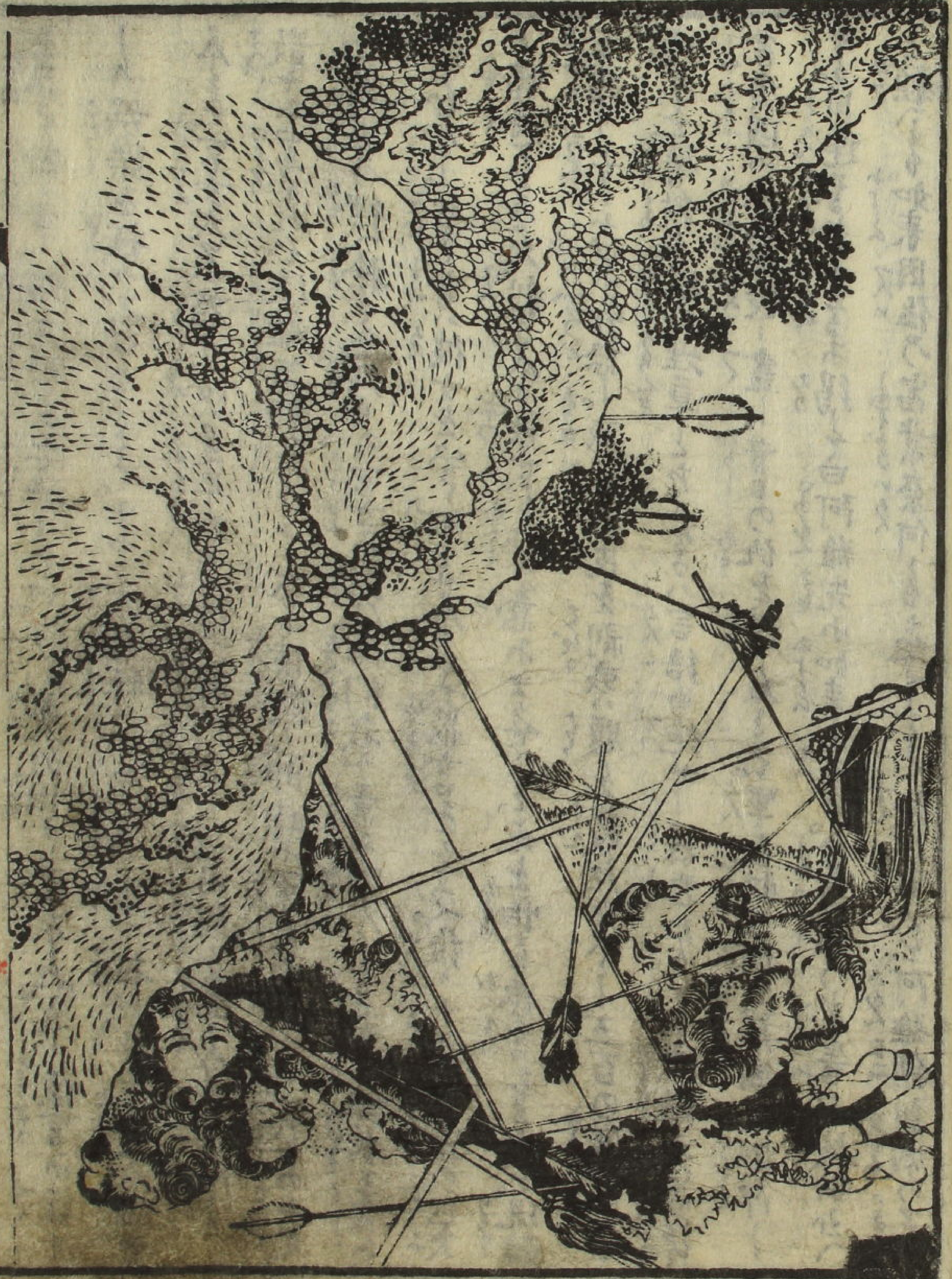
れバ。假に是を王女と号して優填王に贈バ渠真の公主と思ひ怡て迎とり永
く竟を侵すことハあらじといひければ。匿婆王此議然るべしと同意し。摩訶男が處女
に羅綾の衣を着せ。七宝の瓔珞を頂かせ王女を与と号して輦車に乗せて阿
世羅國の使者に与へられば。使者大いに悦び恩を謝して舍衛國を立出國へ回
りて斯と報ず。優填王其妃を見るに。衣冠善美なる上面皃花の如く。細腰柳
の如くなれバ大いに怡び。真の王女なりと想ひ新に宮殿を建て住しめ。寵愛浅から
ず。遂に一男子を設けり。其名を流離太子と号。此太子八才におよぶ頃おひ優填王
流離太子に對ひ你已に八才に及べり。舍衛國ハ射藝の堪能多し。彼國に到り射法
を学ぶべしと命ぜられければ。太子領掌し。好苦梵志といふ者を始め数十人の近臣を
従へて舍衛國に到り。摩訶男が家に往て父王の命を告。射を学ん事を望まれ
る。摩訶男ハ我が孫の事由へ一議にも及ばず許諾し。我が家に留て日毎に教場へ
し。諸釋種の童子と共にして射法を学しめけるに。諸童子ハ流離太子を立ノ詞

男が孫なりと知て侮り軽んじ。非礼の事のミ為けれど。太子稚心に憤りつゝも我ハ他國の者なれバ斯まで為るらんと。胸を抑て射法を学ばれけり。然るに或時流離太子好苦梵士們と逍遥せしに。新に建し講堂有けれバ。何心なく梵士們と内に入られるに堂上に師子座を設け。花を排し香を焼て最も清浄なれバ太子大いに怡び梵士以下とひとしく師子座に上りて遊び戯れ居けり。然る所へ諸釈種の人々入来りて是を見るより大いに怒り。此堂ハ如来を請じ供養しまゐらせん為に新に建立せし講堂なるに。素姓卑き摩訶男が孫を遊しむべき所ならむや早く立去よとて。杖を以て流離太子好苦梵士們を散々に手擲し。堂外へ追出しければ。太子童心に朽惜おもひ心中に想道我父の譲を受て王となりなバ誓て此耻辱を雪がんと。拳を握り牙を咬路上ながら好苦梵志に謂て曰我成長して國王とならバ。舎夷國を伐夷て今日の耻辱を雪んと想へり我もし後年忘るゝ事あらバ你心に覚て我に告よと命じ。偖摩訶男が舎に回り別を告て國へ皈られけり。其後年月推移り。優填王逝去ありて。流離太子譲を受流離王と称して一國の政事を執行ひ。女色に耽り驕奢に荒ミて。いつしか昔日の恨を忘失したるに。好苦梵士旧仇を忘まじと。或時流離王に告て曰。君昔舎夷國の講堂に上りて。多く耻辱をうけ給ひしを忘玉ふなと。向にぞ流離王勃然として色を変じ。我実に往日の忝辱を忘たり。軍馬を起し舎夷國の人民を。一人も残さず殺し尽さんと。火急に三十萬の兵馬を發し。國をおし立て舎夷國へ進伐せしを仏弟阿難ハ是を聞て。父母の國の大事なれバ。太いに驚き。世尊に見て告らく。阿世羅國の流離王今猛軍を發して舎夷國を伐んとす。彼國人ハミな如来の戒律を授りて殺生を禁ぜし兵刃を把て敵を拒ぎ防ぐこと能ずして。素り如来の親戚の國なり。可憐威神力をもつて大厄難を救ひ玉へと乞。世尊曰。舎夷國王ならびに諸釈種因位の業報なり依て流離王の為に屠殺をうくる。是を奈何とも為べからず。只其宿業を愍ミて世宿因を果さしむべしとて。敢て救ひ玉ハず。阿難佛説を聞て。其救ひがたきを悟り

いへども猶族滅せらるゝを見るに忍ず。目連に救を乞。目連是を縁し。釋種五千人を神通力もて鉄鉢の裡に入虚空に上して隱し置ける。斯て流離王ハ三十萬の兵馬を領して舎衛國へ押寄ければ。匿迦王大に狼狽國中の兵卒を聚め。十萬人を城外に出し敵を防しむ然ども此輩皆三宝に皈依し。戒律を授りしかバ。敵を殺さむ事を好まず。悉く鏃を拔唯怕し退きのかんとぞ構ゆる流離王ハ猛烈の悪王なれバ。自己衆を属し敵陣近く押寄るに。待設ゐる釋種の勢。弓絃をならべて散〻に射る事あり。舎衛國ハ射藝萬國に勝れ。數百歩の外を射るにぞ流離王も其箭さきを怖て進み得ず。已に引退んとせしに好苦梵士曳止め諫て曰。敵勢弓勢属といへども。皆釈迦の戒律を受て人命を殺害せざる事を知れバ。唯押寄て一人も残さず屠殺しおへと勧む。流離王是に機を整し。聚軍を下知して攻進むに実も梵士が推察の如く。敵雨の如く箭を射れども悉く鏃なき箭なれバ。味方一人も死傷の者なし。是に依て阿世羅國の勢大いに

心を安んぜず。鉦鼓を鳴して殺到するにぞ。舎衛國の軍散〻に陣隊を破られ皆城中へ逃籠る。茲に摩訶男ハ我が孫流離王が今國家に寇するを恥て水中に身を投て死しければ其一族も時に自殺しけり。流離王ハ是をきくと三軍に令を傳城中の人民の中摩訶男一家の者を殺戮すべし其余の者ハ老幼を嫌ず悉く屠殺せよ但し舎衛國にハ美婦多し容色勝れる者を捉て我に得さすべし者ハ恩賞をあたふべしと觸ければ。無二無三に城門を攻破り。數十頭の悪象を先に驅立て殺倒さする程に國王を初め卿相兵卒數を盡して亡失けり。流離王ハ味方の勝利を見て城中に入摩訶男を尋るに更に見えざる乱軍の中や討れたるへ軍吏を分て普く尋求るに。池水の底より死骸を探り出し。流離王の前へ昇到り斯と告。流離王ハ摩訶男が死骸を見て甚だ憐み。祖父我が此國に寇をなせる憤て死したる事と頻に慚愧し。愁愁に勝ず其所へ軍吏五百人の宮女を生捕て曳来り王に献る。王這宮女を見るに皆無双の國色なれバ忽ち憂

流離王が暴悪
舎夷國の人民を
鏖にする圖



を忘て歓喜し。縄を解して安撫して曰、你們憂ひ怕る事なかれ。我が後宮に任せ
して娯楽を極めさすべしとて。中にも容皃勝れし宮女を近て招き。身を摟て淫せ
んとせしに宮女大に怒り汝は是卑賤の者の孫。何ぞ貴姓の船を摩んとはするやとて
散々に罵りければ流離王勃然として大に憤激し。即時に軍吏に命じて其女の手足
を斷堀の裡へ捨させ。残りの宮女に對ひ。你們我が意に順ふとする者は錦衣玉食に
飽しむべし。背く者は彼女を以て例とせんと云に衆女口をそろへ。縦ひ大悪無道の匹夫
と情通せんより殺されんと欲せば你が意にまかせよと。死を怕ず悪言するにぞ流離
王躍り上て大に勃怒し。或は面の皮を剥或は腹を裁きなんどし。五百の宮女一人も
残さず屠殺し。堀の埋草となしけるは言語に絶せし暴悪なり。流離王は思の侭
舎夷國の人民を殺し盡し。昔日の仇を復しぬとて軍を収て阿世羅國へぞ皈陣し
ける。目連尊者世尊に謁して曰、阿難先に如来に乞て舎夷國の災害を救ひ玉へ
と願へども如来因位の宿業奈何ともすべからずとて救ひ玉はず。阿難猶親戚の災に

罹らん事を憂ひ。弟子を救ひ玉へと求むるにぞ。僅に五千人の釋種を鉄鉢の裡に隱し助
命けんと言上しければ。世尊微笑しまひ。你神通を得たりといへども。宿業を救ふこと能はじ
隠し置たる鉄鉢をおろし。鉢中の人を見よと曰ふにぞ。目連即時に神通をもつて
雲上に隠せし鉄鉢をおろし見るに。五千の釈種悉く餓死なせり。目連大に驚
き世尊に其故を問奉りける

流離王雷死天火焼宮殿

其時釈尊目連をはじめ諸弟子に説て曰。往古此舎夷國に大饑饉有て。一升の金に
一升の米を易ぬ。是に依て人民木皮草根を食て飢を凌ぐに。果は木皮草根を
も喰盡して絶ければ。大池の水を汲干し。數萬の魚を捉て是を食ふ。唯二人の
小児ありて魚を喰ん事を欲せず。却て數千の魚を器に拾ひ隱して。人に食せしめ
ず。捐藏て後放ち活さん事をおもふに。日を経て器をとり出し魚を見んとせしに。悉く
死せり。亦水中に二尾の大魚あり。一尾を拘璅と号し。一尾を多舌と号く。二魚相語

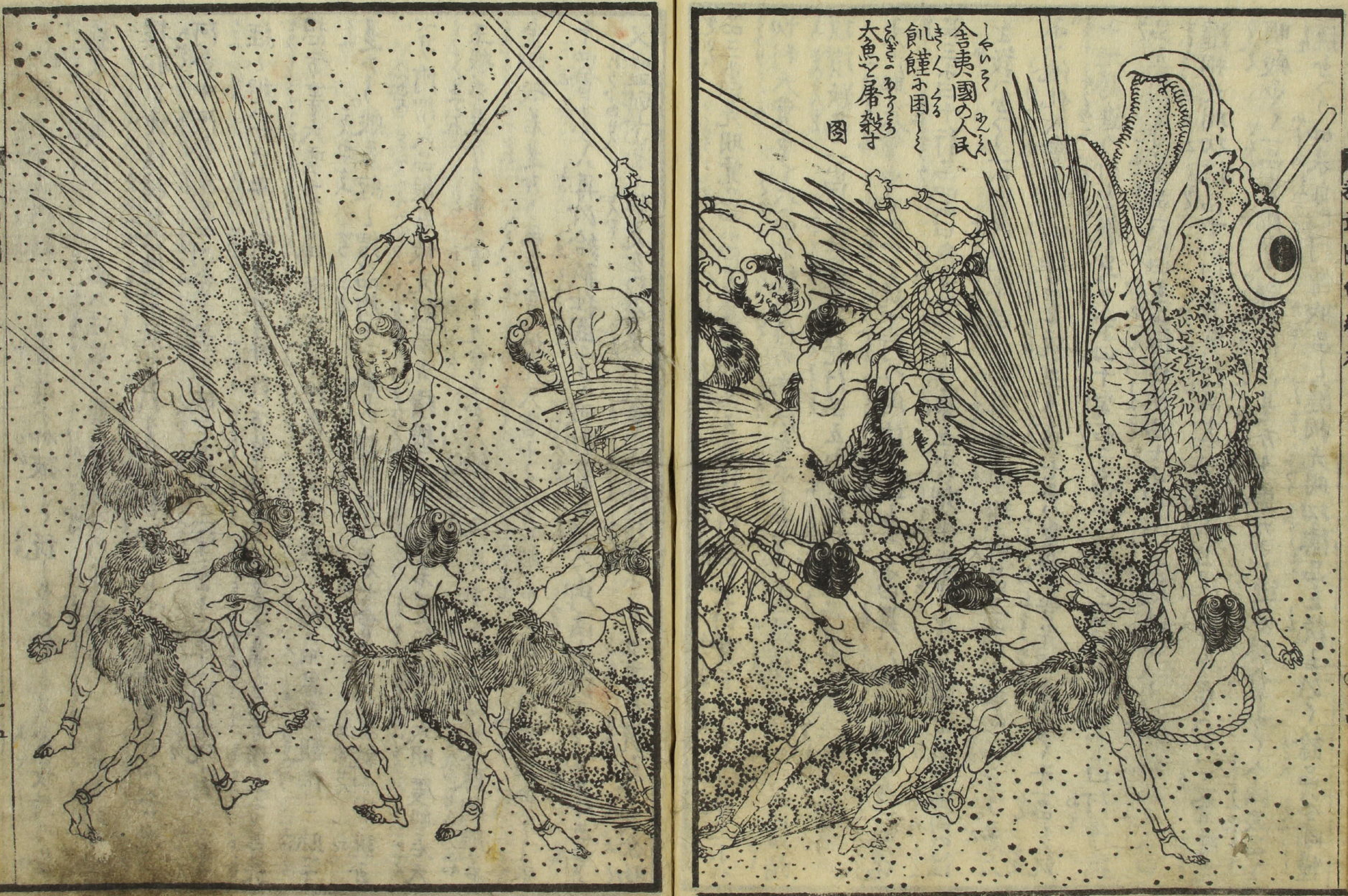
て曰我们ハ是池中の水族敢て這國の人民に害を加へども然るに城中の人民安穏に我が種類を尽し喰ひ又恨なからんや。生を易るとも此仇を復さでおくべきやと語畢て。二大魚も遂に捉噉るゝ彼魚を捉噉し人民ハ。今舎衛國城中の君臣是なり。拘璅魚ハ今の流離王なり。多舌魚ハ今の好苦梵士なり。然して彼二人の小児ハ阿難目連なり。魚を助命して却て魚を殺せし宿業に依て。今五千の人を鉢中に隠し餓死せしめたり。皆是因位のむくひしむる所なれバ。神通力もまたに叓難ハじと説玉へバ。阿難目連其余の諸羅漢も因果應報の端的なるに歎息し亦問て曰今諸釈種前報に依て。流離王の為に屠殺さる流離王ハ悪逆残忍にて猶存命せり此後の叓ハ如何なりやと問せる曰。諸釈種前因に依て流離が為に屠殺せらるれども。戒行を守て敵の人命と傷ざ其功力に依て皆天上に生じ限なき楽を受べし。流離王ハ因位の仇を復とハいへども。三宝に皈依せず暴悪又甚しけれバ。七日の後大厄難に遭眷臣と倶に阿鼻地獄に堕落すべしと説き

ひけるに。諸羅漢感慨し。佛説斯の如くなれバ。流離王が身の上こそ危けれとぞ思ひける。然るに此叓誰いふともなく流離王傳聞て大に驚き。懊悩して寝食を安んぜざりしに。好苦梵士諫て曰大王何ぞ婦女子の如く。釈迦の妄言を信じ。終にや今や隣國大王の猛威に怕て竟を侵さる者なく國人大王の善政に伏して業を楽めり。何に依てか火告を生じいたづらに心を放て歓楽し玉へべしと告れバ流離王亦梵士が辞に惑ひ。恐懼の念を忘れ美女を近づけて淫楽し酒肉を貪て娯楽しけるが。猶飽足ず。阿脂羅河と云川辺に往。美女を左右にし諸臣下を聚て酒宴を催し歓楽して在けるに。俄然として不時に黒雲蔟り。暴風大雨降出し。雷鳴天地を覆すがごとくなれバ。流離王をはじめ諸人大に周障狼狽し我先にと逃んとすれど四方唯冥々として咫尺の間も見えざれバ。電光透間なく閃て凄しきなどいふ許なし。衆人地上に倒れ手足を張て怕恐れけり。百千の雷落かゝり。流離王好苦梵士を先として随従せし男女一人も残ず微塵に砕れ死しけり。加之同時に羅狗耶城へも天火

降て宮殿緒房一時に焼亡し。宮女婇女諸官人老幼男女泣叫。我先に遁れ避んとすれど。猛火八方に充満すれバ遁るゝに路なく。焔に焦れ煙に咽び形勢叫喚大叫喚の苦に異ならず。城中の人民一人も残らず死しけるハ恐ろしとも云も疎なり。余国の諸人近きハ目に視遠きハ傳聞て。佛言の違ハざるを感じ。愈悪を捨善を修し三寶へ心を傾けける

釋尊説法大略

偖も釈迦牟尼世尊ハ一切衆生済度の為に普く四天下を廻り。三世因果の理を示し説法し玉ふ事前後四十九年。説玉ふ経ハ華厳。阿含。方等。般若。法華。涅槃と号し五時六題の御法なり。初頓華厳経ハ七所九會の説法なり。第一ハ广錫國阿蘭若會にて六品を説玉ふ。一に曰世主妙厳品二に曰。如来現相品三に曰。普賢三昧品四に曰世界成就品。五に曰華藏世界品六に曰毘盧遮那品是なり第二ハ广錫國普光明殿會にて六品を説玉ふ。一に曰如来名号品二に曰四諦品三に曰光明覚品四に曰菩薩問明品五に曰浄行品六に曰賢首品なり第三ハ切利天會にて六品を説十住の御法を示し玉へり。一に曰昇須彌頂品二に曰須彌頂讃歎品三に曰十住品四に曰梵行品五に曰發心功徳品六に曰説法品なり第四ハ夜摩天會にて四品を説十行の御法を述玉ふ。一に曰昇夜摩品二に曰夜上讃偈品三に曰十行品四に曰無盡品なり。第五ハ兜率天會にて三品を説十回向の法を教へ玉へり。一に曰昇兜率品二に曰昇兜率讃歎品。三に曰十回向品なり。第六ハ他化天會にて十地品を説玉へり第七ハ重會普光明殿にて十一品を説十地勝進の行を教玉へり。一に曰十定品二に曰十通品三に曰十忍品四に曰阿僧祇品五に曰壽量品六に曰菩薩住所品七に曰不思議法品八に曰相海品九に曰随相光明功徳品十に曰普賢行品十一に曰如来出現品なり第八ハ三會普光明殿にて一品を説玉ふ。離世間品是なり。第九ハ逝多林會にて入法界品を説玉へり如来自巳阿僧祇品と随相光明功徳品を説玉ひて餘品ハ金剛幢


舎夷國の人民
飢饉に困しみ
大魚を屠殺す
図

金剛藏法會功徳林四人の菩薩に加被して説しめ給ひける。其餘長時の華嚴盡未來際の華嚴入法界の華嚴後分の花嚴等は三加葉舎利弗富樓那目連優樓賓羅等に説せ給ひける。阿含經とは是雜阿含長阿含増一阿含中阿含是を四阿含と号て戒定恵の三学を十二年か間に説給へり方等經と謂は十六年の説法なり所謂方等要恵方等大集方等頂王方等光想方等大雲方等佛藏方等陀羅尼其餘楞伽楞嚴思益觀佛三昧等是なり。般若經と謂は四所十六會の説法なり。第七會までは霊鷲山にて説給へり所謂大品般若放光般若光讃般若小品般若道行般若大明度般若天王般若是なり第八會より九會までは給孤独園にて説給へり文殊問般若金剛般若是なり第十會は他化天宮にて一巻般若を説給ひ第十一會より第十四會までは再び給孤独園にて戒勤忍三種の御法を説給へり。第十五會は又霊鷲山にて禅定をの説第十六會は竹林精舎にて智恵を説給へり其餘物く

耶尼國にて婆陀和菩薩の為に苦行般若を説給ひ。其後二十余年を経て仁王般若を説。彼提婆が惑はせし阿闍世頻陀鹿仙龍種四人の太子に説諭し給ひし般若の功力なり。法華經と謂は二所三會の御經なり其題目二十八品第一は霊鷲山にて序品と方便品譬諭品信解品藥草喩品受記品を説給ふ第二は虚空會にて十一品を説給ふ。宝塔品提婆品勧持品安樂行品涌出品。寿量品分別功徳品随喜功徳品法師功徳品常不軽菩薩品如來神力品等なり。亦霊鷲山會にかへりて七品を説給ふ嘱累品藥王品本事品普賢菩薩勧發品以上二十八品の妙經なり。上は菩薩摩訶薩諸天諸佛如來下は羅刹龍王魔梵釈女に對して説法し給へり。涅槃經は説中世尊自已入滅の期を知覺し給ひ。拘尸那城跋提河の辺り娑羅雙林に於て四部の大衆の為に二十五品を説給へり。序品純陀品哀歎品の三品は涅槃絶を説外道小乗の三種を破して正法の三種を示し給へり。長壽品金剛身品名字功

徳品四相品四依品邪正品四諦品四倒品如来性品文字品鳥喩品月喩品菩薩品大衆所問品此十四品に涅槃の義を述玉ひ現病品聖行品梵行品嬰児行品徳王品の五品に涅槃の行を説玉ひ。師子吼品迦葉品陳如品の三品に涅槃の勝用を説。一切衆生悉有佛性如来常住無有変易と教へ凡有心者決定當得阿耨菩提と示し玉へり難有事ども御事なりけり

釋尊遺言并涅槃

世尊寳算七十七歳の時。霊鷲山會上に於て。十大弟子十六羅漢五百羅漢其余三千三百余人の大衆を聚て仰けるハ諸羅漢の修行の躰に就て。撰擇すべき道理あり。皆集會せよとありければ。各領掌し。修行の座位を正し座具をしき坐をしめ。功徳三昧の座禅をなせ。其時世尊獅子の高座に上せ玉ひ。金婆羅華とりて花を左の御手に持せ玉ひて曰。今日の説法ハ功徳附属の大事なり。それ一乗の船に四列を積一粒の芥子に四天下を包む理り。此花に三見あり。一に八種を説法三昧功徳摩訶衍。二に八真如無為説法寂滅摩訶衍。三に八真如舎利非寂滅摩訶衍。功徳附属と示し玉ひて。金婆羅華を捧玉ふに。諸羅漢いまだ其意を悟得ず。座禅工夫して黙然たるに。摩訶迦葉一人破顔微笑し。座を起坐具を絞りて虚空を観じて在けるに。釋尊歓喜して曰吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門あり。不立文字教外別傳なり。摩訶衍の功徳迦葉に附属す。金婆羅華正覚下化衆生是なりとて。自己迦葉の手へ渡させ玉ふ。偖こそ迦葉を滅後の如来と号せり。世尊曰以後迦葉ハ鶏足山に住し。法を修すべし。舎利弗阿難富留那羅睺羅ハ祇園精舎に在て法を修し。目連阿難ハ摩訶耶山と象頭山に住して修法すべしと示し玉ふ。其後又二年を経させ玉ふ跋提河の辺なる娑羅雙林にて説法をなし玉ひたるに。二月上旬に到りて。忽ち背痛の病を得玉ひ。法牀に臥玉ひければ。阿羅漢達大いに驚き。諸國に名醫を需て治療しまゐらせ。騒たる惑を世尊制し止め玉ひ。予

暴悪と罸して
天雷流離王が
王官と焼君臣と
撃殺す図

已に滅度の時至まり。敢て醫藥の及ぶべきにあらねど。予が入滅の後ハ摩訶迦葉を
師として四部の大衆ハ舎利弗目連富樓那可難阿難須善提羅睺羅乃七賢
弟に就て。無為成道を修せよと遺言しまへバ。諸羅漢諸大衆是を聞て地に
仆て泣悲む。是ハ奈何なる御事ぞや。弟子等いまだ真正等覚の奥旨を得ざ
るに我如来忽に捨て涅槃に入玉ハバ弟子们ハ大洋に漂て揖を折闇夜に迷
て燈を消せる如雑を頼てか彼岸へ到りはべるべき。仰ぎ願くハ我佛如来憐愍を垂
て猶一劫を住玉ひ。弟子们を教導させ玉へと願ければ世尊御手を揮玉ひ愚や
你達。天壽素より定數あり。何の方便か是を延る事を得べき。予常願の如く我
心修行し。正覚成道なる事を得て。今将に永く生老病死の四苦を離るゝの期到
まり。歓喜何事か是に如ぞと曰ひ其後ハ舌を緘て諫すれども一言も答をな
し玉ハねど。御身より金色の光明を放ち玉ひ其光大千世界に充ち。よつて諸所に
分れし阿羅漢ハいふへきならず。上ハ梵天帝釈四天王無數の天部諸善神中にハ

百國の王諸仙諸道師。下ハ森羅法王爲眷族。八大龍王恒河の水族にいたる迄。その
光明を見て大苦悩を生じ。是将に釋迦牟尼佛滅度を執まふ瑞應なるべしとて
悲哀號泣して勝ることなかりせば。如来の涅槃の相好を拝せんと悉く双林
へ集會ある。世尊ハ娑羅双樹の下なる法の牀の上に頭北面西右脇臥に臥玉ひ。諸
行無常の機を現し。鶴の林にかれがくに頼なくもみえ玉へバ萬億の僧尼目も昏れ
心消。是生滅法の春の花今や常ならぬ風の誘ふと。紅の涙に衣の袖を絞り。非情
牛馬犬羊象獅子虎豹以下の諸獣。鶴雁鳥孔雀燕雀鴛鴦以下の飛禽其
他羽虫化虫湿虫にいたるまで。双林の辺に聚て。頭を低れ翅を縮め。如来の入滅を悲
しまりね。又経に見えて悼よし。其ハ忉利天喜見城に住玉ふ帝釈天の后妃ハ。先にも説し
如く。正しく前身ハ佛母摩耶夫人なりけるを世玉ひけるが。忽ち五箇の悪夢を見
玉ふ。其一にハ須弥山崩れて四海水渇。其二にハ羅刹奔走して人間の眼中に入。其三に
ハ后妃自己寶冠を失ひ身躰光明消。其四にハ宝珠幢倒れ如意珠を失ひ其五

に八獅子来りて身躰を咬疼痛刀をもて割が如し。后妃此夢を見んて驚き覚たまひ熟
思惟したまひけるハ自己因位の昔浄飯王の后妃に備り。奇夢を見んて如来を懐
妊せしに想ひくらべ給ふ。這五箇の夢いと不吉なり。疑らくハ釈迦牟尼世尊滅
度を執玉ふ凶兆にハあらざるかとおもふをりふしに不思議や頭上の花萎ミ。二にハ腋下
より汗出。三にハ頂中の光滅し。四にハ両眼數瞬き。五にハ本座に着も懶し（天上を天人の五衰といふ）后
妃倍驚き玉ふ所に飛行童子来りて。帝釈天如来の入滅を拝せんとて。娑羅双林へ
降玉へりと報ぜば后妃是を聞玉ひされバこそ五悪夢五衰の告こそ世果して如来滅
度の凶兆なりけりとて。悲哀に勝ず悶絶躃地し玉ふ。宮女們大いに驚き百般に介抱
して呼活するに漸に甦り玉ひ。御涙雨の如く亦も絶入べく歎き玉ひけるが。暁と意
ばれ玉ひ天宮に秘せる起死回生の不老薬をとり出し。錦の嚢に収めて携玉ひ。數
千の宮女を随へ。八葉の輦車に乗じ。飛行童子に前後を護らせ。浄雲に送られて
娑羅双林をさして天降り玉ふ所に白鳩孔雀鸚鵡舎利白鶴鴛鴦迦陵頻伽

共命七種の鳥數萬羽飛来り。羽風を發して后妃の御車を吹上吹戻して。さらに
雙林へ降しまゐらせず擁障の雲ハ西復ひ天の通路も塞りければ后妃是ハ浅ましき
や。再度如来に見なする事も能ざりけるかとて。輦車の裡に伏沈歎き玉ひける
が。余の事の本意なさに。起死回生の霊薬を御手に採せながら是ぞに如来の御
手に届けかしとて。欲我今至身心顛直至如来不老薬と唱へ玉ひ雙林を臨ミ八
て投下し玉ふに。這仙薬飛鳥の如く娑羅双林の如来の法牀さして飛降たるが
世尊の御入滅ハ定まれる事にや。さしもの霊丹雙林樹の梢に停りて。如来の
御手にいたらざるこそ力なけれ。時に雙林にハ。三千世界の諸佛菩薩無梵天帝釋諸
天将百國の諸王諸仙諸道師。阿修羅迦楼羅八大龍王にいたる迄如来涅槃
の相好を拝ミまゐらするに面門より光明を放ち大千世界を照し玉ふ其光の纔に無
量の化佛出現し玉ひ種々の妙花を降し妓楽を奏し。西方浄土無量寿如来
も紫雲に乗じて来降し玉ひ極楽界へ引接し玉ふ体相心も言も及ばれざる感涙

を流し合掌せざるもの一人もなし時に二月十五日寅の上刻大恩教主釋迦牟尼文佛生滅々已寂滅爲樂の儀を示し遂に寂光の都へ歸らせ玉ひければ無數の天部無量の人類禽獣緒虫にいたるまで声を放て泣悲しけるは実理りとぞ思はれける

釋尊滅後現五妙神力

諸羅漢達ハ斯て在果べきにあらざれば如来の尊骸を守護して跋提河を渡天冠寺に入まつり。浄香湯を以て佛躰を沐浴しまゐらせ百端の長氈を以て是を纏ひ。七宝の金棺に斂め。香油を灌ぎ栴檀の槨に納め其上を亦鉄槨に入。郊外に送りける。其人々にハ。多聞第一の阿難尊者智慧第一の舎利弗尊者。解空第一の須菩提尊者。説法第一の富樓那尊者神通第一の目連尊者論議第一の迦旃延尊者。天眼第一の阿那律尊者。信敬第一の可難尊者。密行第一の羅睺羅（頭陀第一ハ阿迦葉を加へて以上を十大弟子といふ）此人々ハ法棺を舁り其優婆離。賓頭盧伽諾迦伐蹉。跋釐堕闍。蘇頻陀。諾矩羅。跋陀羅。迦里伽。半托迦。那伽犀那。因竭陀伐闍羅弗多羅。戍博迦。伐那婆斯。阿氏多。注荼半托迦。（以上を十六羅漢といふ）此人々ハ金棺に先立て金鼓法讃しける是等の羅漢ハ萬億の御弟子の中にも。すぐれて修行の功をとげ。各六通を得て。後の身に添如く如来に隨從しければ。一入歎きの色深く見えたり。偖また如来の此人々を解脱の菩薩と八称しましけり。其次にハ五百羅漢（各名を略す）玉旛宝花華鬘味燈明及び種々の佛具をとり。金棺の背に随へり其次にハ。比丘比丘尼優婆塞優婆夷四部の大衆送りなり。其他難陀王をはじめ百國の諸王民間の老若すべて。愁歎の泪を垂て郊外に充満せり。斯て諸羅漢ハ香薪を積て金棺を居へ明法を意に念じ華厳阿含方等般若法華涅槃等の妙教を讀誦し。三昧座禅観察加行真言勤行して。浄火を香薪に付茶毘しまゐらするに。何なる事にや敢て燃移らざれば煙だに揚らざれば人々是ハ如何にと香薪を積み香油を灌ぎ火を付けれども。愈火移ざれば大に驚き葬法佛意に協ざるにやと各商議あるに。阿那律ハ時思惟して嗃と手を拍て曰。香薪の

然ざるハ摩訶迦葉を待玉ふなるべし彼師兄波婆國鶏足山乃室に篭まして素より六神通を得我佛如来をもて滅後の如来と仰ぐべしと曰ふの大徳なれバ疾より如来の涅槃を知ざるに今に至るまで来ざるハ如何なる事にや各々時座禅観察して待玉へと告られバ衆徒も同意して三昧加行して佛棺を囲繞せる所に果して大迦葉五百人の徒弟を引いて天冠寺の郊外に来着しけれバ大衆是を見て今更如来の御在世を思出し再び悲歎の涙に衣の袖をぞ絞りける大迦葉其体を見て嗚呼哀れなるかな如来已に滅度を執玉ふにや人々ハ何を悲むぞと天を仰ぎ大に笑たる事三度におよぶ大衆其を覚して惘果是ハそも如何如来に別まゐらし悲歎の余り發狂せしか亦ハ天魔破旬の魅るにやと互に面を見合して事に云所をしらず阿難尊者堪かねて迦葉に對ひ師兄ハ如来出山の始より二弟と倶に徒弟となり玉ひ明識抜群なるべけれども今将に法王如来入滅し玉ひ我が們[illegible]四部の大衆乃悲歎をのべむ事なり天上の諸神諸菩薩地下の龍王水族より非情の禽獣諸虫まで

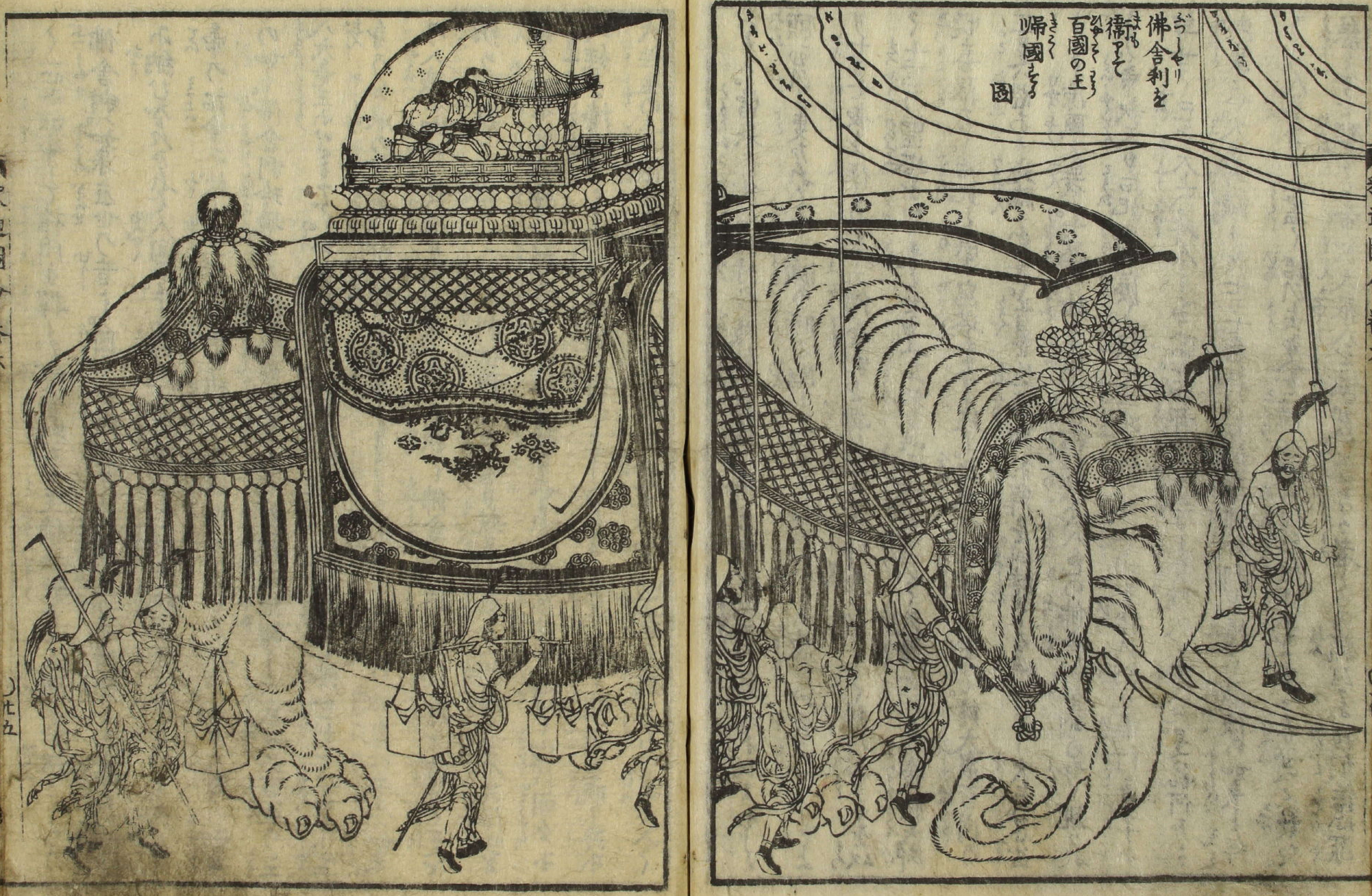
悲み歎く如来の別を惜まざるに師兄ハ如来の臨終の時にも来臨なく遥に後れて徐く今茲に来り剰へ我們が悲歎を笑ひ玉ふハいかにも不審の御事なりとて怒気を含で向られバ迦葉色を平して答て曰事も愚乃問事かな我が三度笑ふハ可笑事と嬉しき事と面白き事と三ツの笑ひなる事有をしるなり阿難益怒て曰是ハ聞事にて候ふ先可笑事とハ何が可笑いや迦葉が曰和僧も始め諸羅漢如来に随ひ奉る四十九年乃妙説を聴ながら今更如来の入滅を看まして事の外に法の魂を失ひ愁歎あるハ特に阿羅漢の位を被る俗躰凡夫に異ならずと其可笑きに笑ひしなり二にハ素我が師釋尊ハ生々の功徳積りて兜率天に生まれ玉ひ善慧菩薩と称しまし一切諸天王の尊信あつて上界に在して法を説玉ひしが一度大悲願を發し玉ひ下界の一切衆生無量の罪を造り永く悪趣に沈淪せるを憐みおぼしめし是を済度せんとて一生補處を去て浄飯王の后妃摩耶夫人を因位乃結縁有る上彼夫人乃命數盡て其年其月に命終あるべきを知覚し

夢に託して其胎内に宿り。四月八日に降誕あり。七日の後に夫人は薨じ給ふ。是素
り天數にして。如来降誕の故にあらざれども。人如来胎中を借給ふなどとも。逝去し給ふ
るも定命なり。然るに愚昧肉眼の凡夫は如来の誕生ゆへに薨し給ふとおもへるは
歯牙にかくるに不足僻事なり。其ことしかれば。我佛如来御發願の如く下界に出
現ましまして。廣大無辺の法を説給ひ一切衆生を済度し。再び寂光の都へ皈らせ給
へば父王も佛心満足しましぬべしと思ふにけに嬉しさ限りなくて笑ひしなり。三つには如来ハ
本不生不滅の御身なるが前に云ふ如く普く衆生を化益せんため汚穢不浄の
人界に生を託し。今涅槃に入て。諸行無常。是生滅法。生滅々已。寂滅為楽の機
を示し。菩薩羅漢四部の大衆の佛法に心得るは未だ不停なる試しの事の
面白さに笑ひしなり。迦葉が鉄石心未練の愁歎に發狂すべきにおそれども。固り天魔
破旬に惑されるにもあらざれば猶も不審のいやと天に響く大音にて。弁舌流水の
如く述るにぞ。阿難を着し萬億の大衆百國の王民間賢愚にいたるまで。あつと

感じ。実も如来の高弟。滅後の如来と仰ぐべしと曰ひし。世尊の金言宜なりけりと
各讃歎しけり。時に迦葉阿難に對して曰。我諸羅漢に後れて如来涅槃の相
好を拝ざりし故。我に金棺を開きて拝させしめ給へと望するに。阿難大に驚き是に
おぼろげならぬ御望なれど如来滅度を挽給ひて已に七日を経ぬれば。今は法相も萎り
給ひつれば此義は思ひ止まり給へとて。固く辞して肯せざるに不測なるかな如来の金
棺自然と開き。金色の御手を出して迦葉を招かせ給ふにぞ。大衆大に驚きおそれ恐ろ
や如来は未だ命終し給はざりけるかと。棺に収め奉りしより東の方躰なきよと。
身に冷汗を流して慚愧後悔をなし迦葉は是を耳にもかけず阿難を誘て金棺
の側へ立寄如来の法相を拝しけるに。随喜の涙に法衣の襟を沾されけり。其時佛左
の御手に。法衣と鉄鉢を執て迦葉に付属し給ひ。右の御手に袈裟と助具とを
把て阿難に付属し給ふ。両羅漢礼して是を頂戴有ければ。金棺亦自然と扉を閉
忽ち一大円相の金光輝き出て緇盖を照し。野草樹木盡く金の色となり。緒

光明に照されし金棺を定るに見えける事難かりしが次に光明の裡に三冥土現はれて
金殿玉塔さながら見えて其次には別光惣光として妙来の智大自在に發て栴檀の
薪に燃あがり烈然と燃上りぬ其次には猛火自然に大風と変じて焔さへに鎮りたる
其次には佛舎利出現ぞ是を涅槃の五妙神力と申せり不思議といふも疎なり諸
羅漢大衆諸王貴賤かかる大奇特を見て縦へ信心の發ざるも皆金剛合掌
して異口同音に南無佛そそと唱て恭敬礼拝す其後焔消煙鎮りけれども大
気火の外に強くして近着事難かりしが如斯して七日七夜に及びければ大衆商議して
今は火気を鎮むべしと數百人跋大河の浄水を汲運びて灌といへども火気愈熾
なり舎利弗堪ずして八大龍王に對ひ你們雨を降して火気を鎮めよと令しければ八
大龍王奉りぬとて恒沙の眷族と倶に跋提河に身を浸し虚空に騰りて水を
捲風を發して大雨を降こと三日三夜大風に洒げども火気以前に倍して熾なれば各十
計盡て絶はてたる方便なく呆はてて惘然たり爰に帝釈天は兼て世尊と御契約

ありし當来作佛の結縁の為如来滅後の佛舎利を南天の鐵塔に収まゐらせんと
願ひし事なれば今入滅の時に臨て其期を待まゐらせしに已に惣光の妙火發りてよ
り七日七夜を經ければ今は佛舎利を拾ひ納べき時節なりとて飛行童子を以
て七宝の霊塔を舁来らせまゐらせ后妃も此玉塔に随ひて天降ましましけり帝釈天御
悦喜限なく后妃と倶に宝塔を守護し火鳳の辺へ降りましましぬ諸大衆百國の
王是は恐ある光臨なりとて首を低恭敬礼拝す此時しも熾なりし火気忽然
として涼風と変じ七宝の砂を生じ金棺の跡に八色の佛舎利金剛の如く現れ
たり帝釈天も后妃も感涙と倶に玉塔の裡へ佛舎利を拾ひ納め飛行童子に
舁せて已に天上へ昇んとしまゐらせしに四部の大衆百王貴賤大いに騒ぎ是は如何なる
御事ぞや火気の鎮るを七日七夜待しも何卒佛舎利を得て滅後の如来と拝
まゐらせん為なるに盡く拾ひ去まゐらせ情なし可憐一位ばかりを分ち与へまゐらせよと歎き
悲みて願ける帝釈天衆人を顧みて愚なる者どもの願ひかな汝們信心深



佛舎利を衛りて百國の王帰國する図

く一心に皈命して棺所を探れバ佛舎利ある事猶無數なれバ朕が今掘るところの
佛舎利ハ。如来在世の昔より。固く契約しありしが後佛出世の時節まで。南天の鐵塔
に納むべきなれバ。人間の手に採んこと可ならずして。袖を拂て昇天したまひけり。諸人天
帝の詔命に伏し。各一心に三宝を祈念し。棺所より立かへれバ。実に天帝の勅命
の如く。佛舎利玲瓏として猶數萬顆有けれバ。皆歓喜踊躍し。大衆及び百國の王
八大竜王にいたるまで分ち戴きて本國に回り。各宝塔を造て佛舎利を安置し。生
身の如来の如く渇仰し。種々に供養しけり。就中夕陽山の妙恵比丘尼ハ如来
の入滅に御愁歎限なく。阿難尊者に頼て佛舎利一顆を得。玉塔を造りて是を
納め阿難を請招して佛舎利供養の為。百日般若を勤むれバ阿難尊者其信心を
感じ。如来智性摩訶般若舎利經を授られけれバ。妙恵比丘尼深く悦び朝夕に
此經を讀誦しますます信心堅固に行ひけるが。二年をへて諸根を脱し終に
大往生の素懐を遂ぬ。且亦如来御遺言の如。迦葉ハ鶏足山の室に入て

法残修し。舎利弗可難富樓那羅睺羅ハ。祇園精舎に住し。阿難ハ忉利天正寺に住
し。目連ハ象頭山に入各如来の妙經を說て衆生を济度し。其余の阿羅漢も諸
國の霊場に住て佛法弘通ある。偖彼八大龍王ハ佛舎利を得て歓喜限りなく
是ぞ我が五衰三熱の苦患を救ひ玉ふ。妙楽微妙の至宝成道の勧具功徳の如
来なりとて渇仰し。龍宮城裡に水晶塔を建て佛舎利を篭朝暮囲繞来拝し
けり。されバ釋尊の功徳ハ天上下界まで普く源遠くして末益多り。中華日域迄
佛法傳り。三宝に皈依し如来の妙法を修して生老病死の四大苦を脱し。極楽界
に往生せる者。世々億萬の數をしらず信ぜざるべし尊むべしと云云

大和屋圭藏参考

弘化二年乙巳四月

發兌書林

京都堀川通二條下ル　越後屋治兵衛
江戸日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛
大阪心齋橋通博労町角　河内屋茂兵衛

釋尊御一代記圖會　全部六冊

擬古　山田意齋叟参考
前北齋老人圖画

釋迦如来の御父浄飯大王の御即位を發端とし憍曇彌摩耶夫人の御懐妊
如来摩耶夫人の胎内に生を託しめ事憍曇彌夫人摩耶の聟胎内乃
王子の出生を不思議と道師に呪咀せしむる條如来夢中乃説法に母の子恩
と銘する事浄飯王藍毘尼園に花の宴を催しるし悉達太子誕生の奇瑞
悉達太子御幼稚より菩提心を發しめ事諸象迦提婆遺恨の故に悉達を
子宮中を出て檀特雪山に難行して正覺成道して出山し衆生を濟度し
る事迦葉舎利弗目蓮及諸羅漢佛弟と成和解耶輸陀羅まで貞心
提婆が十悪須達月蓋両長者の信心流離王の暴悪釈尊御入滅五天竺
神力涅槃像の形まで都て如来御一代の事を記し圖と如きる難有き稀也

浪花 好華堂主人著編

大伴金道忠孝圖會

前篇五冊 後篇五冊

此書ハ天智天皇の御宇小百済國へ援の兵を遣されし事を首として征夷大臣が燈臺鬼と成し謂大伴直鳥の家臣と押領せし奸悪大友皇子浄見原天皇と御合戦の次第金道の主君大鳥の忠義雅明が義心直鳥の看袈金道万苦を凌て父の仇を復し本領に安堵せし迄の奇妻を洩さず記せし実録なり勧善懲悪の道をもちて善を勧め悪を懲しと便とも面白き新本也

同上

扶桑皇統記圖會

前篇六冊 後篇七冊

此書ハ人皇四十代天武天皇の御治世より六十六代醍醐天皇の御宇迄の公事の根元官位等院の草創代々の人物の行状を記し所謂役行者安部仲丸吉備大臣衣通姫光明皇后良弁僧正弓削道鏡恵美押勝中将姫伝教大師弘法大師田村丸浦嶋が子小野篁在原行平業平小野小町僧正遍照菅丞相其外古人の実伝を探り精しく増補し悉く図画と加へ重宝の書く

日本百將傳一夕話

全十冊

松亭金水編述

柳川重信畫圖

抑も本朝開闢以来 神代の事は且く舎て 神武の皇朝より今に至び彼酉王母が桃なりて三千年に向ふまでその中間に生出るものとも多く彼恒河沙ぞやがく限りもあらぬ人物のうちにも威名海内に溢れ功を万世に遺されて来挙て算ふべからざる其中にも傑然たる名将の事實を撰みて輯むる處一百員に上り神武東征の元より順ひ奉りて勲績ある道臣命に肪まりて元亀天正の際に至つて千古獨歩の豊公に畢れりされば作者が杜撰に輯めたる新なるものを汁青林羅山先醒その人物を億兆の中より撰み出されて百将傳と顥せられ各々に一代の勲績の概略を漢字の文を以て書かれたるを人のよく知る所なりして万代不易の活書なれど今に於て卿ぎ学び或ひは其文を国字に和らげ或ひは新増補して童蒙の観るべきものなりど何れも小冊にて事跡ぞかろき也我皇国に勲績ある名将さ知れ

傳へて操り出す惟異聞珍説とも掲げ出して是篇よ一夕話とするの。彼浪華人が編輯あらる百人一首の一夕話よその趣を擬へて綴らるゝらの腹藁にて幸い浪華の書肆ら余が志に同じ意して開板せんと請ふよう速に筆を採りて短才固陋の醜を掲ぐ脱稿に上して近きに発市なさんと然も柳とも一なる百ね他の文明の件ハ紛し神武帝より後の御時より天正の際に至りて年数凡二千二百余　帝王一百八世然縁にの上古中世近世と時代の易るのミならず一百員余良智の将その行ひ一ならず誰ふいの十人に十種の気象あるのみならず權謀智愚の変化あり。されバ此書を出す人ごと好みに随つて巻を開けバその時代の風俗及び一治一乱いふも更なり。その人これ出自家系或ひハ詠出詩文の佳作且まさそれに連る人の物語さへ巨細に載て喩ても此の如ざれバ諸書を集めて彼と是と心を労さんその人この本傳を知るの捷径なり。是に繍像を加へるハ親しく童蒙の手に翫で談ずあんと思ふが為のミ金水老人が多年の丹誠今まで綴りし遊戯の書と斎しく聴なしたまふことなかれ

浪華書賈

群玉堂

河内屋茂兵衛梓

松亭漫筆　全二冊

松亭金水著

溪齋英泉画

此の書ハ和漢の故事に彼と此と對するものを何くれとなく掲げ出し竊に作者が考べを附し漫に説を備へし件も少なからねバその題号を漫筆とハ名づけたり。往時江湖上に文人才子と呼ばるゝ輩ハ文の道大に開けて事ハ尽ぬ然れども雜事に至りて林の木の葉浜辺の真砂算へもつきぬ奇談珍説また是に洩れもあらざるを金水老人心を用ゐて多年に輯めし其れをさらび一たび巻を開くに及び牀下に膝を忘れるものあることを保るべく其事を奇異なることのミまろにわらぞ文法雅俗の隔なく坐右におきて折にふれ楽しミて深きものなりまた…かくまうさバ蒙茉者流の篤病にすまといふるの類ひ鳥滸とや笑ひのやらんたゞその巻を開きそのて恙緒を試みの人よのふ

善知安方忠義傳　第三編　全五冊

松亭金水作

葛飾為齋画

此の草子第一輯ハ京傳翁の佳作なるが脱稿に作者の没故して多年に及べどその迹なし。因て金水編を嗣で既に二編の発市に及び拙なけれども看官が

群玉堂蔵

近江美濃甲斐尾張ふつゞきても事々ぞきれこの後ハ亡等を始基倒しふ書肆が催促ちまち
綴るこの編ふハ将軍太郎と重太郎不測ふ出あひて法個ヶ事を湛るハ天慶れ
むとせらふ二代の英雄まき千代童子ふ邂逅が身のあらめれも、ゆくまふそうしく袖と
濡らの條もあきバまく眼心まる幕もありたび前々の巻ふ等一なりけり捨ぞ繙かつべ
作者ハえより板元の翁も倶ふ笑片向て恵みを仰ぎ奉らんれと

繪本烈戰功記

前編十二冊 後編十二冊 出來

皇都 小澤東陽先生著

東都 柳川重信先生著

一名甲越軍記四編五編

此の書ハ武田信玄上杉謙信の接戰よりして甲越の謀臣勇士の武功と委まく挙り川中島戰國とりて勝敗を詳ふ論ぞ其外處々の烈戰諸將の賢愚及び攻撃防禦の始末とあらゆるその中孝子復讐の美あり義士保國の忠あり悉く記して汎く勸善懲悪の一助とあらん全巻繙而有益の書なり

浪華 群玉堂 心齋橋筋博勞町 河内屋茂兵衛梓

都乃手振り 全一冊

六樹園大人著

江戸そ縉紳をとぐ花北の中ま浅草ち両国ごしあそれありさ夜戯和文をそてよるがごとくふう色まる名文なり

先哲像傳 全四冊

徳齋原先生著

先哲名家ハ多く事蹟のそて省像の傳きハ稀なりたまく古人の肖像ふ對をる時ハ其ぞり逢ふ心ちして其人の徳も想像口をとゞまり此編ハ学者書家をはじめ聞人雑技ふいたるまで由来正しれ省像と真跡を集め各小傳を加へたり

新著門集 全十冊

此書をいにしへより世よ行るゝ字紙ふしるるありとゆる所職考證を集む實録たるれど集中人物の性名居所且年譜を詳ふあらはし得ハ古今未曾有の珍書なり

名家畧傳 全四冊

山崎美成大人著

先哲叢談近世畸人傳よりとられる世よ名高くきこえし篤行の学士隠逸乃文人なりしも逸れたるき言行を集録せし書なり

淡洲據馬馬大人評

開巻百笑　全二冊

此書ハ呑馬大人の集る処奇し
妙こそ今昔の物ヒよ乖し
所にて老若男女大きうり噺を
せふの夜伴けうたまへ長日を
消しせ夜の宗恨を忘のぐるる
故上も古き一書に實に是を開き
これを机に笑を催すかあるる
厳格の人よく者も絶倒せざる
もなし一読して開巻百笑む
疑ふなかれ是を知りまん屋

杁亭金水著

大平樂皇國性質　全二冊

此書ハ儒者と佛者の説の異
なることを説しめうして古今
風俗の変化あるを神社に
詣で給ふなる誤りといふ
説あれぞんじ三味線琴など
従豪富貴士と偏る夫婦喧嘩
やりのむれ江戸の噂云その外
筆てうぐさじ何これとなく雑語
其ふ説を作りきる珍書なり

浪華書房

心斎橋通博労町角
河内屋茂兵衛蔵板

新増補

萬代早引節用集大成

薄葉摺小本一冊に袋入表紙つき至極寿に仕立礼上ケさびくにて甚便利重宝なるなり

此節用集ハ字数殿あれど以文字を尋るに仮名数の
早引とて其中に天地神佛官位人倫衣食器材草木
生類姓氏言語等の部分けして仮名附ハ諸学家に
よりて改め又行草の字を楷書時ハ真の真字まで
筆畫の数を記し。和漢官職の名義現在の上方
諸州大名衆ハ郡毎に御領国城主の名別名処在跡
神社佛閣悉く国所を附。等本草種の異名を記し

孫炙姓氏ハ當时何國諸侯の防藩中に有事を巨
細ニ記し。巻末に諸證文手形之案文男女名頭相性
年代六十國諸丞一〻官都令の地名百官用名名其外
重寶の文数多聚既に漢土字書にも凡四万三千余字五
まく悉く記憶せる者稀なり。本朝の熟字俗語に至ては
殊更に常に取扱ふ文字を識忘せる事多し鮮今此
万代早引は字数拾一万余紙員八百三十余丁に至ての成文字に
ても漏さず集録せる古今未曾海内無双の節用集なるを
三都并諸國都會の書林打寄て冊求メて給ハヾ

新刻
増補
萬代早引節用集大成
眞字附
全二冊

節用集の善本数板ありて世に便利成事譬ふる物なし然れども常用の文字
不足なりて隅皆擲拜の遺憾少からず此度堂田先生丹誠苦心の功を積て
不足雅俗の文字并輯録し尚諸人日用の事を数多増加し都て大成せる故諸君座右
に置て御高覧を給ん事を希而已

○儔葉摺出来仕候に間御用向奉希上候

増
修
續王代一覧
正編 廿五冊
初帙 十冊

此書ハ人皇一百八代後陽成院天皇天正十五年より一百九代後水尾院天皇元和三年迄
三十年此間の治亂変改乃沼草名人達士詩歌連誹将棊囲碁知識の傳紀神社
伴閣の興廃金銀米錢の直分かずし絶えて漏ることなし但原書へ出所
を挙ずして御着究生盡く其本書并引紀しめてを一事一句も胡乱なく
みな拠し座右に考一考古の小史とならし續編ハ元和三年より至かを加へし

開巻驚奇 俠客傳第五集 全五冊

此書第四集四十回までハ故曲亭翁の作にして普く世に知処なり然るに曲亭翁物故せられしかバ其結局に至らず依て浪華の森亭翁其篇を續ぎ第五集四十一回より全く作者の脚色を推考して彼意に違はず編述せられ第五集五冊此ほど刊行し六集を脱稿せられたれバ近れにて世に出すべし希くハ四方の君子本集を賛らバ高評を賜へと云

善智鳥安方忠義傳

其の書初編前後四冊ハ山東京傳翁の編輯にして世上に流布せし處なり然るに結局に至らず後編を作者猶得ざりしに依て此度松亭金水先生に編五冊をこひて著述せしめ是を梓行して書肆の人々見らるゝ者ハ高評を揚て四方に賞翫あらん事を希ふ書にして全部これを其次編に出す

甲陽軍鑑 合巻拾冊

一名武田全書といふ信玄公御一代の戦功兵事を記し陣営兵伍の画図を著し本邦第一の兵書と称すべき佳編なり

浪華書肆 群玉堂主人謹

東都葛飾戴斗画
花鳥画傳 初篇 二篇 全二冊

此書ハ禽鳥草木の景状如何を写し輯るれバ画を好む人の指南となるべし画法を知りて重宝の画手本なり

一勇齋國芳画
一勇画譜 全一冊

國芳多年の工夫を凝して新奇の趣向を画きたる画譜の数々雲洞の景を集めて世に弘むる画本なり

北齋爲一老人画
繪手本水滸画傳 全一冊

此画ハ画狂老人の筆にして水滸傳一百八人の肖像を丹精緻細に書画手本第一の書なり

柳川前重信画
繪手本水滸画傳 全二冊

此画ハ北齋の門人柳川先生の筆にして水滸傳一百八人の英雄を筆に写して画を好む人の便となるべし

葛飾戴斗画
英雄圖會 全一冊

此書ハ本朝の英雄良将名士の肖像を葛飾大人細筆に画工せられ小傳をくハへられて諸君子の求に上梓すへし

一勇斎國芳画
三國英勇画傳 全一冊

此書ハ呉魏蜀三國よりその名高き英雄と呼ぶものをあつめ小傳を附して童蒙の翫ひ手本となし名ある人々の筆力を揮ひ絵の一部今水滸画傳にも劣らぬものなれバ求め給へ

同画
忠臣銘々画傳 全一冊

此書ハ赤穂の義士四十七個誠忠の実伝を挙て國芳大人肖像画きされハ求て流行たまへ

漢斎英泉画
畫本錦之嚢 全一冊

此絵本ハ金銀銅鐵象牙服飾器物蒔絵塔宮殿の彫物根付櫛笄簪細工陶器染物織物金銀の飾り其外諸職人の用うる山水人物花鳥虫獣よりいろいろ細巧の写生をなし諸家大工盤物手本となる

葛飾戴斗画
萬職圖考 初篇 二篇 三篇 四篇 五篇 全五冊

大阪書林　河内屋茂兵衛　梓

東都川關先生著
早引人物故事 全部二冊

此書ハ本朝の昔より近世に至り名将勇士をはじめ詩哥連歌俳諧の達人風流俳優名妓にいたるまで世に名ある人々を集めその時代をわかちいろは引に挙げたれば見安く記し故人を捜索するに便に備ふるものなり

同　誹林冶原大人著
近代世事談 全部五冊合巻三冊 後篇近刻

此書ハ京山城より呉服食菜草木花鳥器財万物近代来輸せる年暦諸流書画詩歌連俳香茶を始め芸及び芝居木の起原人倫雑事年中行事故実等に何の頃より初まりしといふことを委しく集めたれバ右に於て博識の捷径となるべき珍書なり

町家萬寶
一名萬金産業袋
商賣仕法大成 全部六冊 合巻三冊

此書ハ諸職秘密奥儀に至るまで委しくあらハし形ハ図をもて其外諸国の産物よりひとつひとつ委しく記して諸工商の重宝となるべきもの也これより後篇につゞきて出版

手嶋堵菴先生述

女訓 姿見 女前訓躾種

繪入 全一冊

此書ハ女子七才より教育の事を始め第一に成長て孝行貞操の道を失はず賢者の節儀を守り其身を修め婚禮の式作法を始め女鑑とし奇者衣服を縫ぬるの心得其外女一代重宝の事を集め婦人の手本にせん為に著述せし書也女訓の書ハ多しといへども此書ハ其中の一なり

鎌田柳泓先生作

心學五則

全壹冊

人倫の正路といふハ持敬積仁知命致知の五則に外ならず。此書ハ學者の心得をしるし又其五則の本を先生又則のくハしく和解して児童にも解し易く仁義の道と孝弟節儀を行ひ立身出世する術を發揮せられ世上益の書なり

六樹園大人譯 溪斎英泉画

通俗排悶録

前篇六冊 後篇六冊

此書ハ古今の奇事を集めて公事の明断奇談ある所ありて見し人憂をはらし悶を排くの書なり

浪速書肆 心斎橋通博労町角 河内屋茂兵衞 藏版

新編水滸畫傳

全部九十冊出來

近世水滸傳流行に及び草紙錦繪の類迨多しといへども博識君子の外兒女童蒙ハ其原始を知らず。故に曲亭馬琴翁先高井蘭山翁の両先生才力をもて唐本百回を翻譯し國字に和解して文中に葛飾北斎先生の筆力を尽されたる圖画を加へ兒女童幼よりとも讀得安く見に目を歓ばし誦に食を忘る程乃面白きなり。昔時宋の政みだれ小人姦邪朝に満ち正人忠直の士ハ野外にかくれ有志の者ハ擯斥せられき。如何共可為無うなく史筆亦時に諱て後世を欺事多きよりて羅貫中水滸の豪傑に比て大宋の嘉祐三年大尉洪信といへる者鎖魔碑を發てより三十六員の天罡星七十二座の地煞星合て百八人の英勇顕ハれ種々の怪異奇事ある小説を著述し未曾有の大部といへども北斎先生の名画曲亭高井両翁の博識卓見の才力をもて和解者客更に倦事

く見ぬ唐土の地理官舎人家官名に至まで。起居巨細に知る故に雅俗の差別なく讀得て甚益ある實に面白無比小説なり

房州富山奥澤先生著

産科發明

全三冊出來

奥澤先生ハ産科に心を用事信節にして。和漢の産學に長じ。曾而牛馬猿兎の類に至迄悉解体して妊娠の臓腑子宮乃備姿或ハ人躰の胎元幽冥なる處より婦人の腹状を推て妊娠の否を知る事より十月の間人躰の子宮に成育なる事。月々に辨解し。諸の難産治療の經驗方産前産後の心得數条を教示し。曾而先生産婦を治療有し人々の。村里性名を顕し其療方を委諭し。乳汁乳疾の治方。妊婦済生乃信を専に致されるゆへに醫家ハ元よりたゞ素人なりとも一度閲して妊娠の極意を會得せバ子孫相續の基を知る凡産科の書多しといへども。此右に出るものなきは古今未發海内無双の新書也

書林

京都寺町通佛光寺 河内屋藤四郎
江戸日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛
同 貳丁目 山城屋佐兵衛
同 貳丁目 須原屋新兵衛
同 四日市 山城屋政吉
同 本石町十軒店 英大助
同 下谷御成道 英文藏
同 大傳馬町貳丁目 丁子屋平兵衛
同 芝神明前 岡田屋嘉七
大阪心齋橋通本町角 河内屋藤兵衛
大阪心齋橋筋博勞町角 河内屋茂兵衛